

◎佐野恵里（学校教育課 高校教育・GIGA担当）

城北高校の鈴木先生には、「国語科における資質・能力の向上と観点別学習状況評価についての試行」と題した発表をまとめていただき、大変お世話になりました。

令和四年度から新学習指導要領が年次進行で実施されることに伴い、各校においては、生徒が卒業までに身につけることを目指す資質・能力の育成に向け、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善やカリキュラム・マネジメントの充実に取り組まれているところだと思います。このような中、国語科で育成する資質・能力を明確にした上で、観点別学習状況の評価に取り組んだ鈴木先生の発表は、私たちに一つのモデルを示していただけの大変貴重なものでした。ありがとうございました。

学習評価は、学校における教育活動に関し、生徒の学習状況を評価するものです。「生徒にどういった力が身についたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも学習評価の在り方は重要です。

新学習指導要領においては、育成を目指す資質・能力の三つの柱として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」と整理されたことに対応し、観点別学習状況の評価につい

ても「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点に整理されました。観点別学習状況の評価は、評価の基軸を学習指導要領をもとに各学校で作成された国語科の目標に置き、生徒の実現状況を観点ごとに評価し、生徒の学習状況を分析的に捉えるものです。ただ、高校においては観点別学習状況の評価についての協議や研究がまだまだ必要で、評価の更なる工夫・改善が求められています。

それでは、鈴木先生の取組の中で、今後、私たちが観点別学習状況の評価を行っていく上で、ぜひ参考にしたいと思う点について述べたいと思います。

一点目は、学校の教育目標に沿って、国語科の「教科マイスター・ポリシー」を掲げ、国語科として育成すべき資質・能力を学年ごとに系統立てて明確にしている点です。

これまでは、教員の視点から「何を教えるか」という観点で授業が組み立てられることが多くありましたが、新学習指導要領では、生徒の観点で捉え直し、「何ができるようにするか」「育成すべき資質・能力は何か」ということを軸にした授業づくりが必要です。特に国語科では、「教材を教える」という発想になりがちですが、今回の取組は、「教材で資質・能力を身につけさせる」という意識で授業が構成されており、資質・能力ベースの新学習指導要領に沿った授業実践であると思います。

二点目は、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうこ

とができるようにするための工夫がされている点です。

今回の取組では、単元ごと、学期ごとの振り返りとして、また、思考・判断・表現を問う思考力問題における評価基準として、ループリックを活用されています。生徒は、ループリックによる自己評価を通して、何ができるようになったかを意識して学習に取り組めるとともに、教師による評価のフィードバックを受けることで自己反省をしたり、次の学習への動機付けとしたりすることができます。特に「思考する力」や「発信する力」を育成する上で、非常に有効な取組だと思います。

生徒に実施したアンケートでも、単元ごとのループリック評価で、自分が何ができていて何ができていないのかという振り返りを行うことで自分についている力の把握ができるという意見や、授業時プリントや提出物への取組評価がモチベーションにつながるという意見が大半を占めています。

三点目は、学習評価の妥当性・信頼性を高める工夫がされている点です。

鈴木先生も実感されているように、観点別学習状況の評価を行うには、教員の負担感が大きいことが課題となります。一方で、評価規範がしっかりとしていれば評価が進みやすい、という実感も納得できるものです。そこで重要になるのが、評価規範や評価方法を事前に教員同士で検討し、明確にすることです。今回の取組のように、ループリックを事前に検討して作成し、教員間で共有すること、そして、生徒

に対しても評価の観点や仕組みについて事前に説明し、評価結果についてフィードバックすることは、評価の妥当性・信頼性を高める上で有効な取組だと考えます。

また、評価結果についての検討を通して、評価の改善を図っていくことも重要です。どのような場面で、どのように生徒の学習の成果を捉えたのか、さらに的確に捉える方法はないか等、評価規範や評価方法などを必要に応じて見直している点も非常に参考になります。

三年間に渡り、試行錯誤を続けながら学習評価に関する実践を積み重ね、さらに評価結果を検討することで指導の改善を図った鈴木先生の取組は、私たちに多くの示唆を与えてくださるものです。今回の発表事例を参考に、各校の実情に合わせた形で取組を進めていただければと思います。

ただ、学習評価の工夫や改善を教員が個々に行うのは、負担も大きく、困難です。特に、評価が難しい観点として挙げられる「主体的に学習に取り組む態度」を含め、生徒の学習状況をどう見取り、どう評価するか、検討や改善を継続していくためには、組織的・計画的な取組が必要とされます。

先生方におかれましては、多忙な毎日を過ごされていると思います。ぜひ教科会や授業研究会を定期的に実施していただき、評価規範や評価の場面・方法等に関して協議し、学習評価をより良いものへと高めていただきたいと思います。